

浄信寺通信

令和 3 年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』

ユヴァル・ノア・ハラリ著 柴田裕之：訳

「貨幣」・「帝国」・「宗教」この三つの概念。

これらは、すべて人間が創造した虚構、フィクション・ストーリーである。

(上巻第一〇章)



※写真引用 『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』
柴田裕之：訳 (河出書房新社) より

イスラエル生まれで、英国のオックスフォード大学で学位を習得されたヘブライ大学教授。歴史家のユヴァル・ノア・ハラリ氏が、2008年から、ヘブライ大学での20回分の講義録が、2011年、ヘブライ語で『人類史概論』の題で出版された。その後英訳版『Sapiens: A Brief History of Humankind』のタイトルの下、60カ国語で翻訳され、全世界で現在1600万部のベストセラーとなっている。(邦訳『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』柴田裕之：訳(河出書房新社))

人類250万年の歴史から現代に至る文明の歴史、ホモ・サピエンスが何故地球上で、食物連鎖の頂点に立ち、文明を築く事ができたのか？歴史学のみならず、社会学・生物学・人類学などを駆使して独自の視点から、その謎を解き明かす試みの野心的な内容が綴られた書物である。

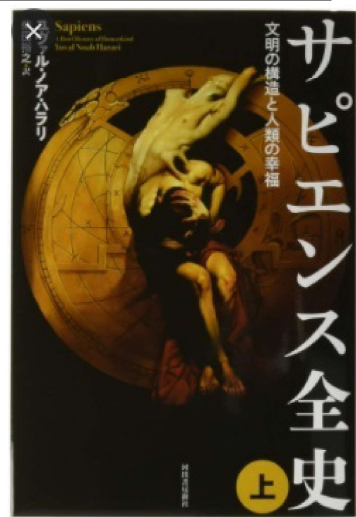
この上下2巻の日本語版も100万部以上の売上がある。上下2巻500頁近い長さで、その全内容の理解には、とうてい小生は及ばないのではあるのだが、ハラリ氏の書籍から、とりあえずは、上巻を中心に要点を小生なりに紹介してみたい。

平和公園墓参のご案内

日時： 8 月 1 2 日 (木)
1 3 日 (金)

午前 8 時頃～午後 1 時頃

NHK-BS ETV (2021.7.1) 放送「サピエンスとパンデミック」の番組でリモート出演されたハラリ氏は、冒頭で「人間の愚かさをけしてみくびってはいけないと言う事。生命の歴史で最大の力を持ちながら、人類



は幾度となく誤った選択をしてきた」その250万年の歴史を「**認知革命**」**「農業革命」**「**科学革命**」という三つの段階に分類して説かれている。

「認知革命」

その中で、最初に登場するのが、七

万年前に人類の脳内で、たまたま遺伝子の突然変異が起こり、サピエンスの脳内の配線が変わり、それまでにない形で考えたり、新しい種類の言葉【言語】を使つての意思疎通が可能になった。その事をハリリ氏は「認知革命」と称された。（このハリリ氏の遺伝子の突然変異説について、それがなぜ起きたかについての説明不足を、社会学者の大澤真幸・生物学者の福岡伸一・長沼毅氏等から指摘されている「サピエンス全史をどう読むか」河出書房新社）

認知革命により目の前に存在していない事柄を想像力で創り出し、それを他人と共有する力を身に付けた。人類は、神話などの虚構の事物を想像し、仲間に語ることができるようになった。人類は共通の神話を信じる事で、他人とも協力することが可能になり、単なる動物の群れを超え

た巨大な集団を組織できるようになった。このフイクションを信じることになった「認知革命」こそ、ネアンデルタール人に競べても、特に身体的能力が抜きんでたわけではなかった我々の祖先。即ち、サピエンスが、世界を支配する理由になったと、述べられている。

「農業革命」

認知革命の次に起きたのが、1万2000年前に起きた「農業革命」。穀物の栽培に成功して、富を得たサピエンス。それは支配する者と、される者の区別を生み。ヒエラルキー（階層的構造）の意味の誕生につながり。現在につづく格差や貧困も、ここに端を発すると、ハリリ氏は、述べられている。

農業革命とは、何よりも支配することでした。それ以前自由に刺激的に多様な動植物を獲得する「狩猟採集生活」を営んできた人類種は、それらを支配しようとはしませんでした。サバンナに行き、動物を狩ったにしても、動物に対して、どこに行き、何を食べ、誰と交尾すべきか指示したりはしませんでした。

しかし一度農業を始めると、常に支配をおこなうようになり。動物を檻に閉じ込め、何を食べるべきか？、どのオスが、どもメスと交尾するかを決め。それは人類が地球に誕生して初めて行われたものでした。それまで何億年も生物は存在してきたのだが、この手の支配は存在しなかった。農業革命以後、他の動物を所有できる。それらは、自分の所有物だ。一度この考えが生まれると、その思考は拡大され、牛や鶏の所有が許されるならば、人間だって所有して良いだろうという事になる。実際奴隷の誕生は、農業の誕生と時期が重なっている。大勢の人間を支配するエリート層や王、司祭と云った人々があらわれ始めた。同じ時期に男女の関係にも変化が見られるようになり、牛や鶏や奴隷を所有できるようになり、女性を所有してもいけないはずはない。こうして夫が、妻を所有する考えが生まれた。これもほぼ同時に誕生している。このようにハリリ氏は「**農業革命**」分析されている。

この「農業革命」は、農耕民は、狩猟採集民と比較すれば、困難で、満足度の低い生活を余儀なくされた。森を焼き、労働負荷をどんどん上げ

て、ストレスと疫病にさいなまれながら食糧の総量をたしかに増す事にはなったが、平均的な農耕民は平均的な狩猟採集民よりも苦勞して働いたのに、その見返りに得られる食べ物は劣っていた。**農業革命**は、史上最大の詐欺だった。その責任は、王や聖職者などの人の責任ではなく、真犯人は、小麦、稲、ジャガイモなどの、一握りの植物種だった。ホモ・サピエンスがそれらを栽培化したのではなく、逆に**ホモ・サピエンス**がそれらによって**家畜化された**のだ。と皮肉を込めて述べられている。

農業革命以降、それまで500万人ほどだった人口が、2億5千万人に増加した。人間社会は次第に拡大し複雑になり、社会秩序を維持している想像上の構造体も精巧になっていった。神話と虚構のおかげで、人々は誕生の瞬間から特定の方法を考え、特定の標準に従って行動し、特定のものを望み、特定の規則を守ることを習慣づけられ、こうして彼らは、人工的な本能を生み出し、そのおかげで膨大な数の見ず知らずの人どうしが効果的に協力できるようになった。この人工的な本能のネットワークのことを、ハリリ氏は「文

化」と定義された。

ハラリ氏は、こうした人類を一つの組織体として束ねていくための重要な役割を担った要素として、「貨幣」・「帝国」・「宗教」の三つをあげられている。これらは、皆人間が創造した虚構、フィクション、ストーリーであると断言されているのである。

貨幣に例えれば、紙に印刷した単なる絵柄が、お札（お金）と言う価値を共通認識して、信用しているから価値が生まれているに過ぎない。「帝国」・「宗教」も、同様に全て人々が「ある」と信じているからこそ、あたかも実在しているように感じるだけであって、実際には存在していない虚構「共通の神話」なのだとのハラリ氏の説には、驚きを禁じえない。ならば、我々は虚構の世界で、それを真実と信じて生きている事になってしまふ。言われてみれば、我々の常識や法律、それは時代とともに変遷して、その時代・時代に人間たちが、新たなフィクションとルールを創造して、その虚構を全ての人間が信じているからこそ成り立っている。

即ち、要約すれば、1万2000年前に唯一生き残った人類は、フィクションストーリーの世界観を広げ、

数多くの文明が現れ、また消え。様々な宗教が誕生し、ルールができ確立され、現在の我々の世界観を創造している。と述べられている。

「科学革命」

500年前には、「科学革命」が起き人口は14倍。生産量は240倍。エネルギー消費量115倍に増大した。七万年前の「認知革命」により、他の人類種を絶滅させた後も、地球環境を破壊し続けてきた。

例えば五万年前サピエンスが、到達したオーストラリア大陸では、短期間に大型動物の90%以上の種を絶滅に追いやった。アメリカ大陸に到達した一万五千年前には、やはり固有種的大型動物の70%以上を絶滅させた。人類は農業革命で小麦などの栽培をはじめる以前に、すでにこの惑星の地上で生きていた哺乳類の50%を絶滅させてしまった。種の絶滅と自然環境の破壊は、ここ二、三世紀の現象で工業化の結果だと考えられてはいるが、実際には、サピエンスは、何千年にもわたり生態系を変え、破壊しつづけてきた。その反面地球上には、羊が10億頭以上。豚は10億頭以上。鶏は250

億羽。動物本来の生き死にを無視して、食用に工場でのベルトコンベヤーで製品を製造するように飼育されている。地球上の大型動物の90%が、肉・乳製品・卵を人間に供給するために奴隷のように飼育されている動物たちである。

ハラリ氏が、2016年9月ZEMの番組収録に、来日された折、誰もがともよく犬の世話をしている日本人を見て、でも豚・牛や他の動物のこととなると、だれも気にかけていません。科学的には犬より豚のほうが賢く、社会性のある動物であるにもかかわらず、まるで機械のように扱われている、こうした動物が感情と感覚をもち、痛み、落ち込み、悲しみを感じると考えることができないのです・・・池上彰氏とのインタビュー記事で述べられていたのが、脳裏から離れないのである。

「多くの動物のいのちの犠牲の上に、我々人間の命をつなぎ、生かされている・・・云々」そうした言葉を、聞き慣れてはいるのだが、このハラリ氏と池上彰氏とのインタビューを聞いて改めて【言葉】のもつ力の凄さを知ったのである。

そしてハラリ氏は、「今日人々は、石器時代によりも、何千倍もの力を持つているにもかかわらず、二万年・三万年前と比較して幸福になつたようには見えない」と含蓄のある言葉を読者に投げかけられているのである。

本書が、世界の著名人から絶大な共感を得て、多くの人々に読まれているのは、ハラリ氏が単に口先だけで、人類に警鐘をならされているのではなくて、自身もヴィーガン（肉や魚ばかりか卵やチーズ、牛乳などもとらない）菜食主義者であり。ヴィパッサナー瞑想の実践者。そして同性婚でもある事と無関係ではないと思うのである。いずれにしても、長期的・巨視的な視点から、ホモ・サピエンスの歴史を学術論文形式でなくて、【物語】で綴った刺激的で、驚きの内容の書籍で、その全容を小生は、まだ未消化のままなのである。



人気監督のリドリー・スコット氏が、本書の映画化を発表したとの記事がネットに掲載されていた。多分SXXを駆使した斬新な映像で、この物語をどう観せてくれのか今から楽しみでもあるのである。

『いづる教』？

宗教学者の山折哲雄氏は、日本の僧侶は、死生観（人類にとつての最大の課題ヒトはなぜ死ぬのか？）を語らなくなったと嘆いておられる。

越前の高田派の寺院生まれのインド仏教学の佐々木閑氏が、「鎌倉時代の浄土教信者にとつては、極楽に阿弥陀様がいらっしゃるというのは、間違いない【事実】だった」しかしながら、科学的世界観を共有する現代にあつては、**ハラリ氏が言うように、宗教における共通した「神話」を共有できない**ので、「西方極楽浄土阿弥陀仏」と問われれば、「本当の極楽世界・阿弥陀さまは、私たちの心の中におられるのです」と言う僧侶がいる。科学とうまくすり合わせてできないことを、「心の問題」に置き換えて解釈しようとしている。それは仏教にとどまらず、イスラム教・キリスト教とて例外ではない。現在おこりつつあるこうした宗教の一元化を佐々木氏は、「こころ教」と定義された。「こころ教」のキーワードは、

「心」・「命」そして動詞は「生きる」。この三つのキーワードでどの宗教もキャッチフレーズを語るようになってきている。と述べられている。ま

ことに言い得て妙な指摘と思うのである。未だ小生には意味不明な文言ではあるのだが、佐々木氏は、典型的な事例として「今、いのちがあなたを生きている」を紹介されていた。（「無葬社会」鵜飼秀徳著 260頁）

じゃ「こころ」とは何だろうか？ そんなツツコミを入れたくなるのだが、『脳はなぜ「心」を作ったか』前野隆司著 筑摩文庫）によれば、「人の心や自分自身という意識は、実は私が意思決定を行なっているのではなくて、無意識で意思決定した後にあたかも**自分自身で意思決定**したかのように**錯覚**しているだけである」と脳科学のいくつかの実験結果から述べられている。前野氏は脳の中でなんらかの機能をこなすニューラルネットワーク（脳の神経回路網）のモジュールが関係していると推測されているのだが、結局のところ、心や意識は、脳という器官の働きで生まれるものであるには違いないのだが、脳がどのようなに働くことによって、心や意識が生まれているのか？についての内容は、まだ**説明**されていないのである。

他方、**命（＝死）**については、サイエンスの立場から、小林武彦氏は「死は生命の連続性を維持する原動力であり、この生と死、変化と選択の繰り返しの結果として、ヒトもこの地球に登場することができた。**死があるおかげで進化し、存在している**。死は現在生きている者から見て、生きた「結果」であり、「終わり」だが、長い生命の歴史から考えると、生きている、存在していることの「原因」であり、新たな変化の始まり」と述べられている。（「生物はなぜ死ぬのか」小林武彦著 講談社現代新書）

同様に田沼靖一氏は、生物進化の過程を述べながら、約10億年前、細胞が、集合体をつくり一つの個体となる多細胞生物が生まれ、そして父親と母親から一組ずつの遺伝子のセットを持つ**二倍体生物の誕生**で、地球上に初めて「オス」「メス」が現れたことを意味している。「死」という現象が、この時から現れた。二倍体生物が誕生して「性」が現れると、同時に「死」が生まれた。生物細胞は、進化の過程で死を手に入れた。生と死は必ずしも表裏をなすものではなくて、**死は生に内包**されたものであり、遺伝子的には、「生／死」

修 勤 講 恩 報

令和 3年11月9日（火）

午前10：00～

勤行・お説教・おとき

との表裏の関係があるのが「性」である。「性」による「生」の連続性を担保する為には「死」が必要であり。生物は、「性」とともに「死」という**自己消去機能**を獲得したからこそ、遺伝子を**更新**して、**繁殖**できるようなった。（「ヒトはどうして死ぬのか死の遺伝子の謎」田沼靖一）

前述の小林氏は、「人間が「死ぬ」ことの意味を知ることによって『**恐怖の対象**でしかなかった「死」というものが、また**違った意味**を持つてくるかもしれません」と述べられている。ここに「こころ教」の新しい展開が見えてくるかも知れない。